

か い づ か 文 化 財 だ よ り

テンパス



TEMPUS

2005年(平成17年) **20**号



も

く

じ

願泉寺の重要文化財

平成16(2004)年度埋蔵文化財発掘調査

歴史を探ろう西葛城地域

特別展「桐の花 原 コウ子」

古文書講座

「江戸時代の婚礼」



願泉寺の重要文化財

—平成の大修理がはじまりました—



願泉寺(貝塚市中町)は、浄土真宗本願寺派の寺院で、室町時代末期に建立された貝塚寺内(じない)の中心寺院です。天正11(1583)年から2年あまり本願寺がおかれ、江戸時代になると住職であるト半(ぼくはん)家が寺内の領主となりました。現在、願泉寺には江戸時代の伽藍(がらん)がほぼそのまま残され、伽藍を構成する建造物の多くが国の重要文化財や市の指定文化財となっています。

今回は、本堂等重要文化財建造物の半解体修理がはじまったことに関わって、願泉寺に残る重要文化財の建造物(平成5年8月17日付指定)をご紹介します。

本堂(ほんどう) 1棟 江戸時代 寛文3(1663)年



梁間、桁行ともに13間半(約27m)四方の本願寺タイプと呼ばれる大規模なものです。寛文2(1662)年の地震の被害を受け、翌寛文3年に寺内住民をはじめ、近郷近在の門徒の寄進により、江戸に居住していた三ツ松村(現貝塚市三ツ松)出身の和泉守貞由(いずみのかみさだよし)を棟梁として呼び寄せ、十余年の歳月をかけて再建されたものです。

内陣の天井絵(てんじょうえ)や「二十四孝」(にじゅうしこう)の欄間彫刻(らんまちょうこく)のほか極めて装飾性に富ん

でいるのが特徴で、一部古い本堂の柱が転用されている部分があります。また、本堂外陣の畳下には能舞台であった跡が残っており、本堂内の能舞台跡としては極めて珍しいものです。

二十四孝...中国で古くから有名な孝子24名の総称で、願泉寺の彫刻は彼らの伝記をもとに元の郭居敬(かくきょけい)が記した教訓書の一場面を彫刻化したものです。

太鼓堂(たいこどう) 1棟 江戸時代 享保4(1719)年

重層の建物で、願泉寺文書「万記録」(よろずきろく)によると、寛文4年(1664)の建立で、享保4年に棟梁の「大工六兵衛」により再建されたとあります。下層は方3間で南側に入口を設け、四方に花頭窓(かとうまど、火灯窓ともいいます)を配します。上層は方2間で、中央に巨大な太鼓を備え付け、四方に彫刻入りの格狭間(こうざま)形の窓を配し、入母屋造(いりもやづくり)の屋根をあげます。願泉寺では、現在も11月に行われている報恩講(ほうおんこう)の際に、法要前の合図として太鼓を打ち鳴らしています。

報恩講...浄土真宗では開祖親鸞の命日に行う法要のことです。



表門(おもてもん) 1棟 江戸時代 延宝7(1679)年

(附)築地塀(ついじべい) 2棟 江戸時代 寛文11(1671)年

(附)目隠塀(めかくしべい) 1棟 江戸時代

表門は規模が大きい四脚門(しきゃくもん)です。正面に竜の彫刻(元禄3・1690年制作銘)を配するほか、全体的に極めて装飾性に富んでいます。願泉寺文書「万記録」によると、延宝7年の建立です。棟梁は「大工次郎左衛門」、「門下廻り彫物」は「和泉守実子加右衛門」(いずみのかみじっしかえもん)とあります。また、築地塀は柱を見せた塗り塀で、上記「万記録」によると、寛文11年の建立です。なお、表門を入ったところに位置する目隠塀は、境内を外から見えないように覆いかくす塀で、築地塀と同じ構造です。現在本堂半解体修理に先立って解体されており、修理終了後に再建される予定です。



四脚門...本柱の前後に使われる2本づつの控柱を脚とみてこう呼ばれます。

万記録...ト半家第7代了観(りょうかん、~1770)の覚書。建造物の建立年代については宝暦元年(1751)の記録にもとづくと思われます。



(附)鐘楼(しょうろう) 1棟 江戸時代

四本柱に切妻造(きりづまづくり)の屋根をあげた建物で、願泉寺文書「万記録」によると、延宝8年(1680)の修理とあります。現在のものは明治初年に貝塚市森の稻荷神社の神宮寺(じんぐうじ)であった青松寺(せいしょうじ)の鐘楼を移したものです。吊り下げられている銅鐘は、もと大和国広瀬郡箸尾郷大福寺(現奈良県北葛城郡広陵町所在の真言宗寺院)の鐘として鎌倉時代初期貞応3年(1224)に制作されたもので、和泉国南郡木島庄水間寺(現貝塚市水間)を経て、天正13年(1585)にト半斎了珍(ぼくはんさいりょうちん)を願主として「海塚(かいづか)之寺内」に買い取られました。

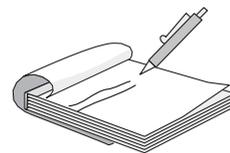
神宮寺...神社に付属して置かれた寺院で、多くはその住職が神職をつとめました。

願泉寺本堂等半解体修理のお知らせ

平成16年9月から重要文化財である願泉寺本堂等の半解体修理がはじまりました。本堂等の建造物は、屋根瓦の葺替など部分的な修理は何度か行われてきましたが、本格的な修理は今回がはじめてです。修理は約7年間で期間中は修理見学会の開催も予定しており、修理経過については市のホームページで随時公開します。また、修理に関わって新たな資料等が発見された時には本紙面でも紹介していく予定です。



平成16(2004)年度 埋蔵文化財発掘調査



平成16年度の発掘調査は12月末日現在、遺跡範囲内の確認調査を47地点、遺跡範囲外の試掘調査を11地点行いました。このうち、沢海岸北遺跡、脇浜遺跡、窪田遺跡・窪田廃寺、澱池遺跡(とどのいけいせき)、加治・神前・畠中遺跡、新井ノ池遺跡、新井・鳥羽北遺跡、清児遺跡(せちごいせき)、森下代遺跡、三ヶ山西遺跡、水間二ノ戸遺跡の各調査地(11地点)において中世の遺物包含層(土器などを含む地層)を確認しました。これらの遺物包含層は、中世の農地層と考えられます。

また、試掘調査により石才通井口遺跡(石才所在)、海塚宝伝遺跡(海塚所在)を遺跡包蔵地として新規登録しました。いずれの遺跡も中世の遺物包含層を確認しました。

今年度、実施した発掘調査について、主な調査成果を紹介します。

沢海岸北遺跡(沢所在)

沢海岸北遺跡は、見出川右岸にある奈良時代から平安時代の遺跡です。

調査地において、中世の農地層と流路2条を検出しました。流路1は、中世の農地に流入した流路と考えられ、流路2(右写真)は検出幅3m、深さ0.6m、流路の最下層より弥生土器片が出土しました。弥生土器片が出土した流路2は、弥生時代までさかのぼる可能性があります。また、調査地の南西方向には、弥生時代の遺跡である沢海岸遺跡が位置しており、調査地とその周辺は弥生時代の生活域に含まれるものと推測されます。



沢海岸北遺跡 流路2

窪田遺跡・窪田廃寺(窪田所在)

窪田遺跡・窪田廃寺は近木川左岸にある弥生時代から中世の遺跡です。

調査地において3箇所調査区を設定し、そのうちの1箇所より柱穴4基、土坑3基、溝1条、落込み状遺構1基を検出し、他の2箇所においても柱穴、溝などを検出しました。これら検出した遺構の切り合い関係からその変遷をみると、掘立柱建物跡(柱穴)・土坑 溝 落込み状遺構の順となります。検出した柱穴により掘立柱建物が建てられていたと考えられることから、集落が形成されていた可能性があります。掘立柱建物(集落)廃絶後は、溝が設けられていることから、調査地は農地として利用されました。落込み状遺構は、粘土採取に伴うものと考えられます。これらの遺構の時期は出土遺物から中世と考えられます。



窪田遺跡・窪田廃寺調査区検出遺構

森下代遺跡（森所在）

森下代遺跡は、近木川右岸にある中世の遺跡です。

調査地においては、中世の農地層と溝2条を検出しました。溝1は検出長2.5m、幅0.7m、深さ0.5mであり、溝2（右写真）は検出長3m、幅1m、深さ0.1mです。遺物は土師器が出土しました。これらの溝は、中世の農地に伴う水路と考えられます。

中世の農地跡について、森下代遺跡における平成13年度の調査例により13世紀から開墾されたものと考えられ、調査地においても同時代に開墾が始まったものと推測されます。



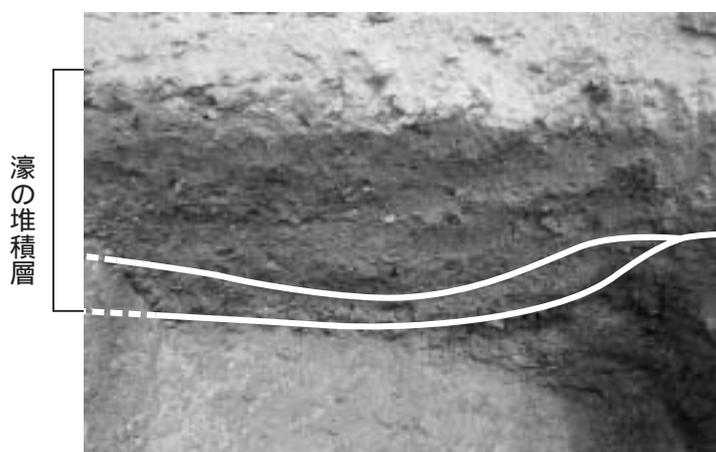
森下代遺跡 溝2

積善寺城跡（しゃくぜんじじょうあと、橋本所在）

近木川左岸にある積善寺城は、天正13（1585）年の豊臣秀吉による紀州攻めの際に、根来衆を中心とする勢力が立て籠もった城です。

調査地において、東西方向の濠と南北方向の濠を検出しました。東西方向の濠の深さは1.5m、南北方向の深さは1.7mであり、濠の幅は調査地外におよんでおり、正確にはわかりません。濠からは瓦片が出土しました。今回の調査地は、濠の南東隅にあたるものと考えられます。

平成15年度の調査においては、本調査地より北西方向へ130mの地点において、幅6m以上、深さ約1.8mの東西方向の濠跡を検出しており、これらの位置関係により積善寺城においては二重の濠の存在を確認することができました。



積善寺城跡（平成16年度調査）濠断面

遺跡名	調査件数	調査面積 (m ²)	遺跡名	調査件数	調査面積 (m ²)
脇浜遺跡	1	3.00	堤三宅遺跡	1	13.50
貝塚寺内町遺跡	3	32.00	窪田遺跡・窪田廃寺	6	170.25
沢海岸遺跡	1	51.50	地蔵堂遺跡	1	4.00
沢海岸北遺跡	1	28.50	地蔵堂廃寺	1	37.75
小瀬五所山遺跡	2	44.00	積善寺城跡	2	20.50
土生遺跡	1	8.00	清児遺跡	1	4.00
加治・神前・畠中遺跡	9	94.25	名越遺跡	1	14.25
新井・鳥羽北遺跡	2	2,797.00	森下代遺跡	2	43.50
久保遺跡	1	4.50	三ツ松北垣外遺跡	1	7.50
半田北遺跡	1	6.00	三ヶ山西遺跡	3	164.70
新井ノ池遺跡	3	53.25	水間二ノ戸遺跡	1	6.00
麻生中出口遺跡	1	3.75	遺跡範囲外	11	300.25
澱池遺跡	1	7.00	合計	58	3,919.00

平成16（2004）年度発掘調査一覧表（12月末現在）

歴史を探ろう！西葛城地域



国宝に指定されている観音堂（通称「釘無堂（くぎなしどう）」）や重要文化財の仏像などのある孝恩寺（こうおんじ）が所在する木積（こつみ）から山手に広がる地域が西葛城（にしかつらぎ）です。

西葛城とは、昭和14（1939）年に貝塚町（現在の貝塚市）に合併した旧西葛城村の地域をさします。現在の町名でいうと、大川・秬谷（きびたに）・木積・蕎原（そぶら）・三ヶ山（みかやま）・馬場にあたります。この地域には、現在でもたくさんの文化財が残されています。今回は、この西葛城地域の歴史の一端をひも解きます。

西葛城は、明治22（1889）年に先に掲げた6ヶ村が合併してできた新しい村です。江戸時代までは、麻生郷と五ヶ庄（ごかしょう）という別々の地域に属していました。貝塚市域で山あい位置するこの地域は、中世の城郭が多く残る地域です。確認されている城跡は根福寺（こんぶくじ）城、蕎原（そぶら）城、三ヶ山城、蛇谷（じゃたに）城の四つです。



じゃたにじょう
蛇谷城は、室町時代末期、木積の蛇谷山（現在の道陸神社の前に位置する山）に築かれた城です。松浦肥前守守（まつらひぜんのかみまもる）が築城したとする伝承のほか、中盛彬（なかもりしげ）著『かりそめのひとりごと』（18世紀前半の書物）には、弘治3（1557）年に松浦孫五郎が築城したと記されています。戦国時代には岸和田城の三好長慶らの軍勢とたびたび戦いました。根来寺（現在の和歌山県那賀郡岩出町にある新義真言宗の本山）との結びつきが強く、根来寺の出城のような存在だったと考えられます。



こんぶくじじょう
根福寺城は、室町時代末期、大川と秬谷の集落の北側に位置する山に築かれた城です。蛇谷城を築いたとされる松浦肥前守守によって、天文4（1535）年に築城されたと伝えられています。当初は「野田山城」と呼ばれていましたが、天文12（1543）年に根来寺（現在の和歌山県那賀郡岩出町にある新義真言宗の本山）の領地となった際「根福寺城」に改称されたといわれています。江戸時代に描かれた「根福寺城絵図」によると、一山全てに城郭が築かれ、現在でも「大門」跡や曲輪（くるわ）、空堀（からほり）が残り、中世の名残をとどめています。和泉地方では最大の中世城郭であり、大阪府下でも飯盛城跡（現在の東大市と四條畷市にまたがる）や芥川城跡（現在の高槻市にある）と並ぶ規模です。



そぶらじょう
蕎原城は、南北朝時代に蕎原の集落の北側に位置する山に築かれた城です。建武3（1336）年に北朝方の畠山国清（はたけやまくにきよ）の軍勢が籠っていたことが、古文書に記されています。



^{みかやまじょう}
三ヶ山城は、戦国時代永禄年間（1558～70）の末に、山直郷（やまだいごう）（現在の岸和田市山直地区）にいた土居備中守牧（びっちゅうのかみまき）が三ヶ山村の北東にそびえる山頂をけずって築いた城と伝えられています。

室町時代から戦国時代にかけて、これらの城跡が示すように、この地域を含む泉南から紀ノ川流域一帯は幾度となく戦場になりました。その後、秀吉の紀州攻めによって根来・雑賀の一揆勢の抵抗がおさえられた後、この地域は秀吉の直轄領となりました。さらに天正13年（1585）から岸和田藩の領地になりました。

西葛城という結びつきは、明治22（1889）年に作り出された行政的な枠組みです。しかし、再編された枠組みの中で、明治41（1908）年に地域内の三つの小学校を統合し、西葛城尋常高等小学校（現在の葛城小学校の前身）が設立され、明治43（1910）年村々にあった神社は西葛城神社に合祀されるなど、村 - 小学校区 - 祭祀を核とした新たな共同体的な結びつきを生み出しました。

西葛城地域は、古代の仏像、中世の寺院建築や城郭などの古い歴史の残る地域です。少し歩いてみると、いにしえの世界にタイムスリップするかも知れません。

貝塚市郷土資料展示室

特別展「桐の花 原 コウ子 一貝塚生まれの 美しき俳人一」

本展は平成16年9月4日(土)から11月7日(日)まで開催しました。本展では、貝塚生まれの女性俳人原 コウ子氏の関係資料を展示し、貝塚在住時代、女性俳人としての軌跡や俳句作品を紹介しました。市民のみなさんはもちろん、俳句を学んでおられる方、コウ子氏のお弟子さんにあたる「鹿火屋」（かびや）同人・会員の方々など、市内外から多くの方々にご来室いただき、640人の観覧者を数えました。

展示期間中には、第67回かいつか歴史文化セミナーとして、10月24日(日)に上記特別展の記念講演会と記念俳句会を開催しました。講演会では、「鹿火屋」主宰の原 和子氏を講師にお招きし、「俳人 原 コウ子」と題し、女性俳人としての原 コウ子の人柄やその俳句作品について、日常生活のエピソードも交えながらお話しいただきました。講演会終了後、引き続き和子氏選による記念俳句会を開催しました。俳句会は50名を超える参加者で、「秋の草」と雑詠を兼題に句を詠んでいただきました。時間の都合上、正式な選句をしていただくことができませんでしたが、原 和子氏のご厚情により、当日出された俳句は後日1冊にまとめていただき、参加者のみなさんにお送りされました。



古文書講座

「江戸時代の婚礼 結納から結婚式まで」

平成16年8月28日(土)から4回にわたり、「江戸時代の婚礼 結納から結婚式まで」と題して古文書講座を開催しました。

近年、結婚式は結婚式場やホテルなどで行われることが一般的ですが、江戸時代にはもちろんそのような施設はありませんし、結婚に対してのとらえ方も今とは大きく異なります。

そこで、今回の講座では江戸時代の結婚の様子や、嫁入り道具などに注目し、当時の結婚記録を解説していきました。



その中では、江戸時代に女性の化粧として定着していた「おはぐろ」の道具や、長持(ながもち)や挟箱(はさみばこ)といった収納道具など、当時の嫁入り道具を紹介しました。

また、結納のしきたり、結婚式の進め方などがわかる江戸時代の帳面を読み進めました。当時と比べて今日でもその制度は残っていますが、少しずつ変化してきていることがわかりました。江戸時代であれば、当然立てられる仲人(なこうど)を立てる形式も減ってきていますし、「舅入(しゅうといり)」といった結婚式と一体になった行事も省略されるようになってきています。

参加者の方からは、「ウチにも長持があるよ」「いろいろな嫁入り道具があったんやね」といった声をうかがい、当時の社会と現代社会との違いを実感していただいたことと思います。

なお、次回の古文書講座(第19回)は、平成17年5月から6月にかけて開催を予定しています。詳細につきましては、「広報かいつか」4月号でお知らせいたします。皆さまふるってご参加ください。

申 込：必要事項(住所、氏名、電話番号)をはがき、Eメール、F a x、電話、
いずれかの方法で、下記まで事前にご連絡下さい。

連 絡 先：〒597 - 8585 大阪府貝塚市畠中1 - 17 - 1 貝塚市教育委員会 社会教育課
T E L 0724 (33) 7126 / F A X 0724 (33) 7107

Eメールアドレスが変更になりました。登録されているアドレスの変更をお願いします。

旧 shakaikyoiku@city.kaizuka.osaka.jp

新 shakaikyoiku@city.kaizuka.lg.jp

編集後記

平成16年は、災害の多い一年でした。大雨、台風、地震と日本国内でも多くの人命が奪われ、建物、道路等の被害もありました。文化財も多くの被害を受けており、失われようとしています。被害を受けた文化財の修復、復旧が急がれます。

かいつか文化財だよりテンプス20号

平成17年1月31日発行

貝塚市教育委員会

〒597 8585 貝塚市畠中1丁目17-1

Tel (0724) 33-7126 Fax (0724) 33-7107

Email: shakaikyoiku@city.kaizuka.lg.jp

印刷 和歌山印刷所

テンプスとはラテン語で「時」を意味します。

年4回発行：各1,000部

印刷単価：67^円

